このスポット・おすすめ!

幸せをつなぐ
ハンドメイドショップ **SABO**

40名超の作家の作品を展示
今月のテーマは「サマー」

充実したおうち時間を過ごすためにインテリアをもっと楽しもう!ということで、ウインズ取材班がやって来たのは読谷村波平公民館近くにあるハンドメイドショップ。店内には40名を超える作家のレンタルボックスが並び、布小物、アクセサリー、木工芸品、島ぞうり、ベビー用品等々、さまざまなジャンルのアイテムがディスプレーされています。

「“幸せを繋ぐ”がお店のコンセプト。もともとハンドメイド作品が大好きで、子どもの着物づくりのために仕立てを習い始めたことがきっかけでますますその魅力にハマり、同じ思いや趣味を持つ人たちとつながっていきたい、と考えるようになったんです」とはオーナーの上間奈美さん。ご自身も一作家としてオリジナル作品を展示販売しており、お店の公式 Instagram とは別に sabo_Original のアカウントでも公開しています。

オープンしたのは昨年3月。当初からの願い通りに幸せの連鎖は徐々に広がり、今年2月には雑貨展「YUーマルシェ」を読谷村地域振興センターで開催しました。そのとき驚いたのは、同じ村内で活動していながら初めて出会った作家が多かったこと。「彼ら彼女らの魅力を地元からもっと発信していければ」との思いを強めました。

お店では隔月でテーマを決めて、企画作品を集めたブースを設け、ディスプレイも変えています。5・6月のテーマは「サマー」。心が明るくパッと晴れ渡るような、お気に入りのアイテムを見つけに行きたいですね。

住所 / 読谷村波平60番地（1-A）
電話 /080-3223-0228
時間 /11:00～18:00
休み / 火・日曜日
駐車 / あり

【Instagram】
@handmadeshop_sabo
@sabo_original

なぞなぞに 読者 答えて ☺❖プレゼント❖☺

このスポット・おすすめコーナーで紹介の
『SABO』で使える
2,000円分 お買物券
3名様

Q なぞなぞ
高ければ高いほど、小さいものって何?

ヒント
高いほど小さく見えるもの。

5月号当選者 前号の答え〈かぐや姫〉

おめでとうございます!
★山里 紀陽さん(沖縄市在住)
★金城 輝彦さん(読谷村在住)
★島尻直樹・久美子さん(沖縄市在住)

ワイワイ広場

読者プレゼント応募方法

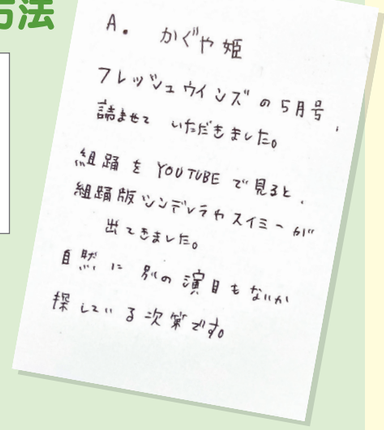
宛先
切手 はがき 904-0303
読谷村字伊良皆237-1
ウインズ
『広報誌係』
①住所 ②氏名
③年齢 ④職業
⑤電話番号
裏
⑥なぞなぞの答え
⑦ご意見・ご感想

応募者の中から抽選で、読者プレゼントを進呈致します。どしどしご応募下さい!

締め切り
2020年6月20日消印有効
「当選者は次号(Vol.190)にて発表致します」

『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)

お便り紹介♪


A. かぐや姫
フレッシュウインズの5月号、
読ませて いただきました。
組踊をYOUTUBEで見ると、
組踊版シンデレラやスイミーが
出てきました。
自然に涙目もないが
探している次第です。

Fresh フレッシュ ウインズ

人と人とのつながりを大切に…。池原建設が大切なお客様にお送りする手作り広報誌

Fresh Winds
2020年 6月号
Vol.189

2021 TOKYO 2020

(株)池原建設 企画事業部ウインズ
〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆 237-1
営業時間 / 9:00～18:00（年末年始を除く）

住宅のメンテナンスや補修等のご相談は、お気軽にスタッフへお声掛け下さい!

0120-229-512 ウインズ 池原建設 検索

読谷村想い合ち手作りマスク10000人プロジェクト

読谷村在住の中村喜美枝さん親子から、300枚の手作りマスクの寄贈を受けたことを機にスタートしたプロジェクト。有志の皆さんから届いた手作り・市販マスクを、読谷村内で必要とする方や施設へ提供します。

受付先:読谷村役場1階 福祉課 tel. 098-982-9209

少しずつ日常生活が戻り始めており、営業を再開するお店も、道行く車の数も増えてきました。本誌で毎月掲載していた県内の主なイベント告知コーナーも、ひと月でも早く復活しますように。 平年の梅雨明けは6月23日頃。雨の合間を縫って、慌てずゆっくりとお出かけの感覚を取り戻していけたらいいですね。

～スマイルビジョン～
Smile Vision!

伝説の名工の技を継ぎ、沖縄の伝統芸能を陰で支える
「納得の一丁ができるまで」三線職人・又吉章盛さんの世界

■三線のすべての型の製作技術について、若かりし頃に当時の名工の下で修行し体得。
それでも何十年たっても三線づくりは難産の連続で、又吉さんは「三線は生き物のようだ」といいます。

今月は「楽器」としての三線にクローズアップ。現代三線の祖といわれる名工・喜屋武盛朝氏、稲福具永氏の技を継承し、約半世紀にわたって「ものづくり」の立場から沖縄の三線文化を支える又吉章盛さんの工房を訪ねました。

幼少時から三線に興味 職人人生を振り返る

又吉章盛さんは1941（昭和16）年うるま市（旧具志川市）出身。先ほど職人歴が約50年と書きましたが、それは三線工として働き始めた20代の頃からカウントしたもの。実際にはもっと若い頃から、いや物心ついたときから三線とその製作過程に興味を抱き、「学校帰りに遊びに行く友だちと離れて、近所の工房で三線がつくられる様子を食い入るように眺めていたり、ある家が三線の名器を入手したとの話を聞けば一人で訪ねて見せてもらったり、そんな子どもでした」と回想します。また父親が三線製作に携わっていたこともあり、兄と一緒に手伝いをするうちに腕前も上達し、中学生の頃には一人で自作するまでになりました。

■三線の製作工程。左から、棹の鳩胸の加工。胴（チーガ）の木枠に沿って蛇皮を張りクサビで張り具合を調整する「蛇皮張り」。
一番右は棹にカラクリを付けてチーガに差し込む「部当て（ブーアティ）」、原木の製材・裁断から削り出し、すべて手作業で仕上げます

本格的に三線職人の道に飛び込んだのは29歳のとき。現代三線の祖として名高い「泡瀬のチャングァーぬターリー」こと喜屋武盛朝氏から直接薫陶を受けた稲福具永氏に師事し、技術の習得に励みました。今でもものづくりの世界では「習うより慣れろ」の傾向が強いように、当時はなおさら知識以上に体得優先。師匠の一挙手一投足をつぶさに観察し、独り言とも知れない言葉の真意を読みほどき、自身の血肉に変えていきました。

その後はしばらく那覇に拠点を移し、三線店から製作を受注し生計を立てる傍ら、市内で活躍中の名工を訪ねて三線づくりの腕に一層磨きをかけました。三線の棹には真壁型（マカビ）、知念大工型（チニンデーク）、与那型（ユナー）などさまざまな伝統の「型」がありますが、「すべての型をこの手で極めたい」との一心で、「あの先生はマカビの名手、この先生はユナーの鳩胸を取るのが抜群にうまい」といった具合に、いわば専門分野を掘り下げるようにしてそれぞれの型の技法を習得していきました。

このように伝統の型の特徴を完璧に把握し、自在に製作できることこそが、又吉さんを現代の名工と呼べる最たる所以です。95（平成7）年には奄美市立奄美博物館から7種類の型の製作依頼が届き、すべて一人で仕上げて納品しました。

那覇での修行に区切りを付けて、地元に戻ったのは74（昭和49）年。現在のうるま市赤道に「又吉三味線店」を構え、同市宮里には軽作業ができる工房を設立。昔変わらぬ志で日夜、三線製作に励んでいます。

三線製作者を表舞台へ 「厳選100丁展」開催

地道に積み上げてきたこれまでのキャリアの中で、社会的に最もインパクトのあったものといえば、2009（平成21）年に県立博物館・美術館で開催した「匠の技！又吉章盛の世界三味線製作厳選100丁展」でしょう。又吉さんは三線製作の傍ら演奏家としても1992（平成4）年に師範免許を取得し、古典音楽研究所を開設して後進の指導に取り組んでおり、その門下生が中心になって08年に実行委員会を設立。野村流音楽協会会長らの賛同も得て、ほぼ手作り・手弁当で開催にこぎ着けました。

■「100丁展」は2009年6月4日から21日まで県立博物館・美術館で開催

開催時に発行した記念誌には、冒頭のあいさつ文の中に次のようなメッセージが添えられています。

「本展示会は、これまで製作した中から、特に心に残る作品を厳選して一〇〇丁を展示しました。沖縄の三味線が国内や国外にも徐々に普及されはじめていることは大変喜ばしいことですが、三味線の外国製品輸入で、伝統的な型の変化や質の低下をもたらすのではないかと危惧しています。この展示会を機に、三味線製作に関わる人たちの存在に陽の目が当たり、後継者育成のきっかけになれば幸いに存じます」。

沖縄の伝統芸能の普及・発展は、「表舞台」に立つ演者や奏者を「陰」で支える三線製作者があってこそ。見方を変えれば、将来的な文化継承に対する危機感が、「三線という楽器は誰の手でどのようにしてつくられているのか、多くの人に知ってもらわなければ」と又吉さんを動かしました。

「個人的な展示会と聞いて、びっくりする来場者の方が多数。ある関係者からは“本来なら県や市が主催しないといけないレベルですね”と言っていただきました。うれしいことですね」。

三線が沖縄県伝統工芸品に指定された2012（平成24）年に先駆けること3年。琉球・沖縄の長い三線製作史上でも非常に価値のある、エポックメイキングな展示会でした。

■これまで制作した中で最も心に残った100丁の三線を、当時の所有者から借りて展示

確かな技と歴史を伝えるために 三線博物館の開設が目標

沖縄の芸能文化の将来を案じる幅広い視野を持ち合わせている一方で、三線製作の現場においてはどこまでも職人気質。「50年以上つくり続けていても、いまだに満足したことがありません。もっとうまくできたのではないか、と思うことばかりで、10年前、20年前の作品などは恥ずかしくて目も当てられない」と技術の向上に余念がありません。製材して墨打ち（寸法出し）した後、一般的には型紙を当てて枠線を転写しますが、又吉さんは型紙は使わずフィーリングでどんどん制作していきます。その様子はまるで仏師が木に宿る仏の姿を彫り当てていくようでもあり、どこか神秘的。「三線づくりに時間は関係ありません。一日向き合ってもまったく作業が進まない日もあれば、深夜に突如思い立って始めることもある。そうやって完成した三線はどれもわが子のようにいとおしいものです」。

又吉さんは三線の名器の定義として、「音・美的感覚」の2要素を挙げます。このうち美的感覚についていえば、目指すのはモナリザの肖像画。「あれ以上笑ったり、逆に表情を引き締めたりすると、たちまちあの美貌は崩れてしまう。そんな微妙な頃合いに収めるのが難しい」。そのためにも三線製作者には「木目を見極める眼力」が必要であり、木目を読み違えてしまうと「その木が本来持っている能力を最大限に発揮させることができない」といいます。

現在は毎週日曜日にうるま市宮里の工房で、「三線制作後継者育成塾」を開催。三線職人になるための門戸を広く一般に開放し、喜屋武盛朝・稲福具永の流れをくむ「4代目」の育成に力を入れています。そして今後の大きな目標は「三線博物館を開くこと」。受け継がれた確かな技を継ぎ、「三線の正しい歴史を伝えていきたい」と意気込んでいます。

■三線製作の技を次代へ継承するために。うるま市宮里の工房では、毎週土曜日に子どもを対象にした「とんとんみー三線クラブ」を、日曜日に一般向けの「三線製作後継者育成塾」を開催